

筑波山地域ジオブランド認定ガイドライン

【食料加工品】

筑波山地域ジオブランドとして認定する食料加工品（料理を含む，一次産品である農林水産物は除く）は，以下の１～３のいずれかと４及び５の項目を満たし，認定審査会において筑波山地域ジオパークの普及・啓発及び地域経済の活性化につながる優れた商品であると認められたものとする。

１．食材・素材

食材・素材については，筑波山地域内で生産されたものが含まれていること。

２．拠点施設

事業所が，筑波山地域内にあり，生産・製造・調理・加工等のいずれかを行っていること。

３．デザイン

筑波山地域ジオパークをイメージ出来る商品・容器包装等であること。

４．ストーリー性

筑波山地域ジオパークの特徴的な地形や地質，歴史，文化，生態系などとの関連が語れるストーリー性のある商品であること。（別紙「筑波山地域ジオパークのジオストーリー」参照）

５．価格・品質・信頼性・安全性

商品の価格設定が適切であるとともに商品価値に優れ，一定の品質を保持できる体制（材料の仕入れ手段，生産手段，販売手段，調理手段，第三者からの苦情等への対応等）を有していること。

また，食品衛生法及び生産・販売・調理に関する法令を遵守し，衛生管理及び品質管理，消費者保護に細心の注意を図っていること。

筑波山地域ジオパークのジオストーリー

ストーリー01 筑波山は、火山のようで火山じゃない！

とがった2つの頂と、なだらかなすそ野をもつ筑波山。そのかたちは、富士山のような火山のかたちに似ていますが、噴火でできた山ではありません。筑波山は、約8000万年～6000万年前、マグマが地下深部でゆっくり冷え固まってできた岩石が、その長い年月をかけて地殻変動によって隆起してできた山なのです。山頂～中腹をつくる斑れい岩は、風化や侵食に強いものの、複数の大きな割れ目が発達しています。

一方、中腹を作る花こう岩は、風化によってボロボロになっています。

そのため、大雨や大きな地震の際には、上方から落ちてきた斑れい岩の岩石と風化した花こう岩がともに崩れ、たびたび土石流となって山麓まで流れ下ります。火山のような筑波山の美しい姿は、主に過去の度重なる土石流によって作り出されたものだったのです。

ストーリー02 筑波・鶏足山塊で海洋プレートの動きを探れ！

筑波山塊の山々では、約2億5000万年～1億1500万年前に、大陸から遠く離れた海洋底や海山の上でできたチャートや石灰岩、大陸近くの高圧付近でできた砂岩や泥岩の互層などが見られます。このような岩石の集まりは「付加体」とよばれ、海洋プレートが大陸プレートの下に沈み込む際、海洋プレート上の岩石が海溝付近で次々と大陸側へ押しつけられ、はり付いていくことでできました。

また、鶏足山塊の南端や筑波山塊の南東部では、筑波山塊の花こう岩や斑れい岩をつくった大量のマグマの高熱で、性質の異なる岩石へと変化したものを含まれています。

長い年月をかけて海洋プレートの大移動と沈み込み、それに伴う地下深部の大量のマグマの形成というダイナミックな地球の歴史を感じられることが、筑波・鶏足山塊をつくる岩石の魅力のひとつです。

ストーリー03 海から川、そして湖へと姿を変えた霞ヶ浦

V字型をした霞ヶ浦の独特なかたちや、霞ヶ浦周辺で見られる地層の形成には、約13万年前以降の海面の上昇や低下と、それに伴う河川の発達や流路の変化が関係しています。例えば、湖岸で見られる貝化石を含む地層は、約13万年～12万年前、霞ヶ浦周辺が「古東京湾」とよばれる海の底だった時代につくられました。

一方、霞ヶ浦につき出した「出島」の原型は、約10万年前以降の海面低下とともに発達した「古鬼怒川」が供給した大量の土砂でつくられたものです。

また、「土浦入り」とよばれる出島南部の入り江は、約3万2000年～2万4000年前、古鬼怒川がけずり込んだ深い谷地形の名残です。

現在の霞ヶ浦は、地域の人々の暮らしを支える淡水の湖ですが、その地形や地質には、この地域がかつて内海の底や川の河口域だった痕跡がいくつも残されています。

ストーリー04 南方系と北方系の動植物がともに生きる筑波山塊

筑波山をはじめ、筑波山塊の山々はどれも標高900mに満たない低山ですが、多種多様な動植物を目にすることができます。この動植物の豊富さには、生物の分布から見て、筑波山塊が西日本と東北日本の境界近くに位置していることや、ふもとから山頂にかけて生じる気候差が、温暖な気候を好む動植物と冷涼な気候を好む動植物の生育を可能にしていることが関係しています。

また、筑波山の動植物には、過去の気候・環境変化の歴史を今に伝えるものもあります。例えば、山頂付近のブナやミズナラなどの落葉樹は、約2万年前の寒冷な時代の生態系の名残と言われています。

また、中腹付近のスダジイやタブノキなどの常緑樹は、約7000年～6000年前の温暖で現在よりも内陸に海岸線があった時代に、筑波山塊まで分布を広げたと考えられています。

ストーリー05 後世に伝えよう！蛇行河川の脅威と恵み

関東平野の北東部を流れる桜川や小貝川は、中流域から下流域までの勾配がゆるやかで、流路が大きく蛇行し、霞ヶ浦や利根川へ合流するという特徴を持っています。またこれらの河川は、大雨などで流量がいきに増えると、すみやかな排水が難しくなるため、氾濫や逆流などによる洪水被害をその流域にもたらしてきました。

一方、蛇行河川の流れや氾濫に伴う土砂の運搬や堆積、けずり込みは、自然堤防や氾濫原などの地形をつくり出します。桜川や小貝川の流域には、これらの河川地形とともに、水辺で暮らす人々の知恵や信仰の歴史、今では貴重な湿地・里山の生態系がよく残されています。

私たちは、これらの自然や人々の営みを守るとともに、蛇行河川がもたらす脅威や恵み、自然との調和の大切さを後世に伝えていかなければなりません。

ストーリー06 信仰と文学を育む神秘の山、筑波山

古来、筑波山は、関東地方のランドマークとしての役割を担うとともに、山岳信仰の対象や神仏習合の霊場、江戸の鬼門を守る霊山として、遠方から多くの人々が訪れる山でした。山頂や中腹にある筑波山神社の本殿・拝殿や、山麓に残る古い神社や仏閣は、このような筑波山の信仰の歴史を今に伝えています。

筑波山は、奈良時代につくられた万葉集や常陸風土記にも登場し、江戸時代には「西の富士、東の筑波」と称されるとともに、俳句を通じて「紫峰」とよばれるようになりました。

また、近代文学や絵画においても、自らの心情を映す山として盛んに取り上げられています。

このように、多くの先人の心をとらえ、この地域の歴史や文化を育んできた筑波山の美しい姿、自然と風土は、今も原風景として地域の人々に愛されています。

ストーリー07 筑波山地域の産業の発展を支えた石・土・水

筑波山の山々は、「真壁石」や「稲田石」など良質な花こう岩産地として有名で、山麓では昔から石材業が盛んです。これらの花こう岩は、日本橋や日本銀行、迎賓館などの名だたる建造物に用いられ、日本の近代建築の発展に貢献しました。

一方、筑波山塊の花こう岩が風化してできた大量の粘土は、古くから陶器・瓦・土管づくりなどの窯業を育み、江戸時代には、関東を代表する「笠間焼」を世に送り出しました。

また、筑波山塊の山々から湧き出る水は、関東平野でとれる米・小麦・大豆、霞ヶ浦流域の水運と結びつき、酒・味噌・醤油づくりなどの醸造業を発展させました。

さらに霞ヶ浦では、帆引き船を使った帆引き網漁が考案され、豊富にとれるワカサギやシラウオなどの湖の幸を使った水産加工業が盛んになりました。